

石川淳選集

第三卷

石川淳選集 第3巻 (全17巻)

1980年1月7日 第1刷発行 ©

¥ 1300

著 者	いし	かわ	じゅん
	石	川	淳
発行者	緑	川	亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発行所 株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

雪のイヴ	五
飛梅	二七
變化雜載	五
野ざらし	七三
最後の晚餐	一〇二
善財	一三七
片しぐれ	一八三
野守鏡	二〇九
影ふたつ	二六二

夜は夜もすがら

二八三

小
說
三

雪のイヴ

ことはひどく寒いだらうとまへぶれのあつた冬が
存外あたたかく、二月に入つて十日ばかり春近い日和
がつづいたが、それがけふになつて、急にぐつと冷え
こんで来て、夕方の空模様あやしく、雲ひくく垂れて、
ここ有樂町の電車道に掛けわたした省線のガードの、
鐵のとどろきと巷のほこりとに鍛えられたやつが、北
風に吹きさらされながら、雲の重みの下にたわむまで
に凍えた。このガードの下は、晴れた日でさへいつも
うす暗く、じめじめして、うつかり通りかかるとあた
まの上からなにやらえたいの知れぬ水がぼたぼた落ち
て来て、舗道の隅にはまた尿くさい水がたまり、紙屑

がたまり、さらに人間までそこにたまつて、ずらりと
泥をかぶつた灰色の一行は靴直し靴みがき、食らひつ
くやうな眼を光らしながら中腰の姿勢で行人の足もと
を狙つてゐる。けふはつねよりみなほ暗く、風さむく、
ひとの出足もにぶいの、この灰色の一行はあひかは
らず、背後の煤けた壁にしみついたけしきで、これぎ
りの生き場所の、おのれの持場から去らうとはしない。
その列のまへに立つて、さきに立つてゐるひとびとの
中にまじつて、今あいたばかりのみがき臺の上に片足
を載せると、そこに顔を伏せてうづくまつてゐたのが
すぐ刷毛をとつて、泥靴をこすりはじめたが、かへつ
て泥が靴の皮にすりこまれるやうなぐあひで、足指の
さきに刷毛の目が荒くこたへた。

すぐ向うに、廣い道幅ひとつへだてて、大きい建物
が立つてゐる。見世物小屋である。ときにちようど入
替りの刻限と見えて、小屋の前にはかにさわがしく、

中からどつと押し出されて来た人波が街路にあふれて、どよめきながら四方に散つて行つたが、その一むれがガード下の道にもながれて来た。まつさきに二人づれの若い女の、赤い花模様のきれをあたまたからすつぽりかぶつたのが、だいぶくたびれたみじかい外套をやけに肩でゆりあげながら、いそぎ足で靴みがきの列のまへを歩きすぎようとするうしろから、これも女ばかり五六人、年ごろも風態も似かよつたのが、追ひかけるやうにして、けしきばんだ調子あらく、

「ねえさん、ちよつとお待ちよ。」

くりかへして聲をかけられて、ふりむいたさきの二人を、ぐるりととりかこむかたちで、顔と顔まぢかに詰め寄りながら、

「あんたたち、どつから来たのさ。」

二人づれの、どちらも見るからに鼻柱の低くふてぶてしいのが、いつそ居直つたけはひで、

「どつから来たつていいぢやないか。よけいなお世話だよ。」

たちまち殺氣立つた五六人の一組が、

「なまいきいつてやがら。ここをどこだとおもつてんだい。ラク町だよ。ブクロ（池袋）あたりをうろついてるのたちがふんだよ。あんたたち、どつから来たんだか知らないけど、このへんにまぎれこんで来てへんなまねされちや、ラク町の顔にかかはら。」

「へんなまねつて、なにしたつてえのさ。」

「泥棒したぢやないか。」

「なんだつて。」

「こないだ、ここでお客をひろつて行つて品川の宿屋で五千圓盗んだのは、あんたたちぢやないか。ちやんとわかつてるんだよ。ラク町にやそんなことするのはひとりもゐないんだからね。」

「盗んだんぢやないよ。もらつたんだよ。お客からお

金とるの、あたりまへぢやないか。なんだい、ラク町、ラク町つて。あんたたちだつてパンパンのくせにさ。」

そばを通りかかりのもの、靴をみがかせてゐたもの、靴みがきまでがちよつと手をとめて、みなめづらしげに、事あれかしといふ顔つきで、このいさかひを眺めてゐたが、そのとき、すでにみがきをへた靴の右足をおろして、代りに左足を載せかけたみがき臺の、ついその向う、眼の下の地べたから、いきなり疳高いさけびがあがつた。

「のしちやへ、のしちやへ。」

たしかに、靴みがきにはちがひない。しかし、あやめもわからぬよごれた布きれで頬かぶりして、仕事服の、泥と靴墨とでどすぐろくなつたやつをだぶだぶに著て、夕ぐれの道ばたにうつむきの姿勢でゐるのだから、年のころ面體など見定めがたく、男とも女とも氣にとめずにゐたのに、今ぱつと立ちあがつたそのすが

たの、刷毛を手につかんだまま、すさまじくあらくれながら、しぜん若い女のしなやかさで、だぶだぶの仕事服が肩からずれかかつて、ぼたんのとれてゐる胸もとに色あざやかな眞赤なセーター、乳房のかたちがかがへるまでにむつくり盛り上つて、はだかつた襟の、頸筋あらはに白く、そこにちよつと靴墨のはねの附いてゐるのがいつそなまめかしかつた。もつとも、ずぼんは男物の、これもだぶだぶの茶褐色のやつで、靴はゴム靴のぼつてりしたのを、踵かるく踏んですすみ出て、いさかひのまんなかに割つて入ると、二人づれのはうにむかつて、噛みつくように、

「パンパンだつて。なにいつてやがんだい。パンパンならどうしたつてんだい。男がみんないくぢがないから、あたしたちがはたらいてるんぢやないか。パンパンと泥棒とはちがふんだよ。おまへたちみたいに、泥棒だなんて、古いんだよ。氣をつけろよ。」

いつかひとだかりがして、まはりに立ちどまつた見物の中から、ようようと、やれやれとか、懸聲さわがしくなつたのに、二人づれのはうは長居はおそれとさとつてか、あとずさりに二言三言、すてぜりふをのこしながら、夕闇をいいしほに、ひとごみにまぎれて逃げるやうにすがたを消したあとに、五六人の一組、これは勝ちほこつたていで、逃げる敵を追ひかけようとまではせず、なほも口うるさくがやがや、もと來た道に引揚げかかつたが、その中にまじつて、れいの靴みがきの女が肩をそびやかして、仲間の先棒を振つたかたちで、ともにしやべりあひながらどこやらへ引揚げてゆきさうに見えた。

こちらは靴の右足だけはぴかぴか光つたが、左足は泥のままなので、「おいおい」と呼びとめると、「え」とふりかへつたのに、
「靴が半分のこつてゐる。」

「あ、さうさう。」

「商賣をわすれたか。もつとも、こつちのはうは副業らしいが。」

「今みがいたげるわよ。」

まだ手にぶらさげてゐる刷毛を振りまはしながら、もとの位置にさつと跳ねかへつて來て、それでも殊勝らしく、いそいで靴をみがきにかかつた。見おろしたところ、十八九ぐらゐの年ごろだらう。おもひなしか、泥をかぶつたいでたちにも甘ずっぱい肢體の精氣がにじみ出てゐて、今はずり落ちたかぶりものの下に、仕事服がまぐれて、猪首と見えるまでにふとりじしの、あぶらの浮いた襟あしが背中につづくあたりもにくからず、刷毛をもつ手のうごくにつれて、その襟あしから眞赤なセーターの肩にかけて肉のふるへるけしきは、とても色つばいなどといふ時勢おくれの齒がゆいふぜいではなく、御方便なもので、ただちに當世好みの劣

情露骨な繪様を呈してゐて、うすぎたないところこそかへつて今人には花なのだらう。

「とんだ手数をかけちやつたな。いそがしいところを。」

「どういたしまして、商賣でございます。」

「本職のはうはどうだね。立入禁止で、われわれおことわりかね。」

「一人前の口きいてら。こんなぼろ靴はいてるくせに。」

「あたらしい靴がほしいんだが、ちかごろまた靴が見えなくなつたやうだ。」

「あるわよ。千二百圓出せば賣つたげるわ。」

「その金でビールでものまう。」

「いつしよにのまうつていふはなし。」

「さつそく本性をあらはして來たな。」

「ふん。」

みがきをはつて十圓札を出すと、だまつてポケットにねぢこんで、あたりをはばかりか、ちよつと聲をひそめて、

「ねえ、ほんとにビールのむ。」

「靴すりあふ縁だ。なんなら附合つてもいいさ。」

「ぢや、待つててよ。」

「どこで。」

「數寄屋橋の小公園の入口のところで。すぐ行くわ。もう店しまふから。」

一しきりびゆつと地を拂つた暗い風に吹きまくられて、はらはらと、人間も露店もひとしく巷のほこりの中に散りみだれてゆくのに、襟さむく、足もとから逐ひたてられて、いそいでわたつた橋のかなた、小公園の入口のまへ、その柵にもたれて、鋪道を低く舞つて來た新聞紙の靴にからまるのを踏みのけながら、敵の來るにもせよ來ないにもせよ、ともあれ風のとぎれ

たすきにマツチをすつてたばこに火をつけた。

まのあたりの町のけしき、道路にも電車にもひとが湧いたやうにむれてゐるのは勤めの引ける時刻だからだらう。その雑鬧の中を突つ切つて、風とともにうなりながら、トラックが通る。それが二臺三臺とつづいて通る。トラックに乗つてゐるのは鼻息の荒い外國產の青春である。けだし、ガード下の淑女のよき友だらう。國の盛衰のごとき、たかが歴史上の一時の流行などはよそに見て、たをやめはつねに盡きず、ますらはあらたに興つて、さつそくおほつぴらにべたべたの附合は、なによりありがたいといふ永遠の平和の、めでたい兆にちがひない。ときに、ふと袁中郎の詩句をおもひうかべた。俠客飛鷹古道傍、佳人賣笑垂楊裏といふ一聯である。いつの世のこととも、どの土地のこととも知らず、心象のんびりして、おほまかで、唐山四千年の平和の貫祿、もつてうかがひ見るにたりる。

俠客はよろしくこれを諺解してちゆうつばらと訓むべきか。ただし江戸の中つ腹の、そそつかしい喧嘩ずきの、向うみずとはちがつて、みだりに姑息な笑を笑はうとしない游俠の、氣を負ふものの風貌だらう。さういへば、ここに見るトラックのわかものたちも、みなむつつりして、頬赤くほてつて、なにかおこつてゐるやうな顔つきだが、そのじつやけに上機嫌らしく、これあるひは新興の俠客なのかも知れない。ただきのどくなことに、今日の東京では總じて道具だてとのはず、空には雀の影さへ見えないくらゐだから、豪儀に鷹を飛ばさうとしても、そのすべが無い。しかし、鷹の代りに、地上に物資を満載したトラックを飛ばせるのも、また似たやうないいきもちなのだらう。一方、佳人賣笑の件は、目下國中にありあまつてゐるものは女だけといふうはさだから、これはさいはひ手持の品物ですぐ間に合ふ。ところは橋のたもと、溝川はうす

ぎたなく淀んではゐても、地はともかく水邊にのぞんでゐて、垂楊の翠こそないが、瘦せた枯木ならばそのへんにちらほら立つてゐるし、ついさつきまで晝のあひだに早取寫眞の店も出てゐようといふ背景になつてゐる。ここに於て、トラックの上とガードの下とで、ほこり風より速い戀の取引、たちどころに手に手をとつて一夜の道行といふふぜいは、世界はちがつてもまた格別の興趣、かならずしも明人の詩境におとるまい。それにしても、このせつかくの平和の景觀、見た目にさまでたのしからず、こころのんびりとしなないのは、たぶんこちらの身にまとふ外套がすりきれてゐて、寒さがしみるせゐだらう。かうして小公園の柵にもたれて、ぼんやりあたりを眺めてゐると、ここは和朝でもなく中華でもなく、どこやら名も知れぬ遠い國の小さい町、その町はづれの猶太街の門前にたたずみながら、あひびきの相手はさしづめ馬車屋の娘、まぐさのには

ひのするやつを、行きずりのたはけごろに待ちうけてゐるかのやうでもあつた。

二本目のたばこに火をつけたとき、橋の向うから、れいの女が電車道をわたつて來た。あたまからかぶつた赤いきれにくたびれた外套は一目でそれと知れるやつらのいでたち、仕事服はもう脱いだらしく、だぶだぶのずぼんも脱いでゐて、おそろくその下にかさねてはいてゐたものか、ホームスパンのずぼん、この時候には薄すぎるが、しかし寒さうなやうすはなく、存外すらりとした足つきで、つと近よつて來ると、すぐ腕をからんで、こちらの手にもつてゐたたばこを器用にさらつてくはへながら、

「行かうよ。」

「どこへ。」

「ビールのみにさ。」

「あ、さうさう。」

「わすれちゃだめよ。」

「どこか行きつけのうちはあるのか。」

「だまつていつしよに來て。」

銀座のはうにあるき出しながら、ふと顔を見ると、おしろいも紅も濃くつけ直して來てゐたが、あごの下にまだ靴墨のはねが消え残つてゐるのに、

「墨がついてるぞ。」

「どこに……嘗めてよ。」

「そつとしておけ。狐の化けそこなひ、靴みがきじつはO・Kの、尻尾が出てゐておもしろい。」

「なにいつてんのさ。あんたなんか、どう見たつて、ただの書生ばうぢやないか。」

「本業はヤミ屋だ。」

「うそつき。そんな大したしろものぢやないよ。」

「貧棒書生は假のすがた、じつは……」

「じつは、なにさ。」

「會我ノ五郎。」

「え。」

それは相手には通じなかつた。ことばのつき穂を、風がさらつて行つた。

二

さそはれるままに、屋臺の焼鳥屋でカストリをのんだあとで、すでに燈のともつてゐる西銀座の裏町にはひると、狭い地面に軒を噛みあはせて一寸の隙をあらそひ立つたにはか普請のブラック、夜目にもペンキの色のかなまましいのはいづれも酒場のこしらへで、その中の一軒、外側に煉瓦を貼りつけて、盲の魚のやうに窓なしの、青つぼく塗りつぶした扉に横文字の看板、いやにひつそりかまへた店のまへに來て、「ここんち、むかしのレコードがあるのよ。」と、女はいきなりこちらの腕をぎゆつと引張りながら、その扉を押した。

扉の内側はつい突あたりの壁にそつて小さいスタンドの仕掛、ただ生地のままの薄い板を張りわたしただけのもので、そこにとまつた客が二三人さむさうな恰好でコップを嘗めてゐたが、別に床の上にティブルが二組置いてあつて、このはうはあいてゐたので、その椅子にかけて、なまぬるいビールを一杯ぐつとのみながら、あたりを見まはすと、廣くもない室内の、スタンドのすぐそばに、今日ではめづらしいものの一つになつた電氣蓄音機が黒光りに据ゑつけてあつて、そこに赤い豆電球がついてゐて、ラヂオ兼用なのだらう、なにやらニュースらしい聲が低くうなつてゐた。

そのとき、店のものがラヂオをとめて、レコードを掛替へた。今度は明るく鳴り出した。曲はチャイコフスキイの胡桃割りらしい。それが途中で息をきつてがたんがたんと鳴るのは盤が割れてゐるせゐだらう。

女は口ほどにはのめないやうすで、二杯目のコップ

を置いて、こどものするやうに落花生を一にぎりつかんでたべながら、

「レコードでも、むかしのものつて、やつぱりいいみたいだね。」

「そのむかしといふやつを、おまへ知つてゐるのか。」

「知らないよ。」

「知らないから、いいのか。」

「なんだか知らないけど、ぼんやり聞いてると、きらくだよ。」

「相手が遠すぎるから、喧嘩になるきづかひがなくて、安心か。今のものぢや、さういかないかね。」

「ヂャズかい。ヂャズつて、そら、お金がたくさんあつて、いいきものをきて、うまいものをうんとたべて、お酒をのんで、踊つて、かへりにカーが待つてゐて……さういふふうのものぢやない。ちよつといいけど、なんだかつらあてみたいだね。こつちにそんな生活が